1　久米南町　めざす教育

「第2次久米南町教育振興基本計画」より

久米南町では、どんな子どもを育てたいの？

【育みたい資質能力】　自立　　共生　　郷土を愛する心

自立

自立した一人の人間として、たくましく生きる

- ●学ぶ意欲や確かな学力
- ●社会人として必要な道徳性や規範意識
- ●たくましく生きるための健康・体力
- ●困難な課題にも粘り強く挑戦しながら自己の能力や可能性を発揮する力、たくましさ　など

共生

自他ともに尊重し、主体的に社会や自然と関わる

- ●自他の人格や生命を尊重する心
- ●豊かな人間関係を築き、互いに助け合える力
- ●多様性を認め合い、他者を思いやる心
- ●国際社会を生きていく力　　など

郷土を愛する心

久米南町を大切に思い、世界に視野を広げ、より良い社会づくりに参画する

- ●久米南町の歴史、伝統、文化などを大切にする心
- ●よりよい社会づくりに参画・貢献する態度

学校教育の中で育成する主な力

知

自ら学び、考え、行動する力の育成

- ●「主体的・対話的で深い学び」を実現します
  - ★日々の学習での実現
  - ★「個別学習」と「協働学習」の両面で育成

学ぶ意欲

学ぶ楽しさや
わかる喜びを
実感させ、
学習意欲を高める
取組を実施します

確かな学力

社会変化に対応し
新しい時代を
生き抜く力を育みます。
知識・技能の習得だけでなく、
思考力・判断力・表現力等の
育成や学びに向かう力、
人間性等の涵養を
進めていきます

徳

道徳教育・人権教育・生徒指導

- ●学校を一つの社会として、子どもの規範意識が高まるよう指導の充実を図ります
- ●「安心できる居場所」としての学校をめざします
  - ★児童生徒が元気に学校生活を送ることをめざし生徒指導体制を充実。全職員で対応

コミュニケーション能力の育成

- ●多様な人数集団の中で日常的に育成をめざします

郷土愛の醸成

- ●子ども自身が地域を知り、地域活性化の一端を担い、充実感を得る経験を意図的にしくみます

体

基本的生活習慣の育成

- ●「早寝・早起き・朝ごはん」の実現をめざします
- ●適切なメディア利用を自ら考える子どもを育てます
  - ★各学校で発達段階に応じた取組を実施
  - ★町内メディアコントロール週間を実施するなど、地域全体で取組を推進

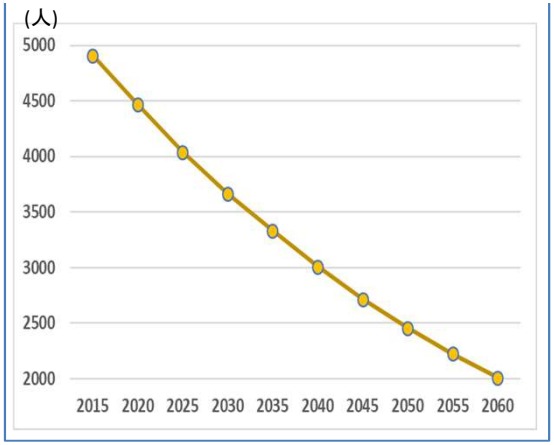
運動能力・体力の向上

- ●運動能力及び体力向上の場を設定をします
  - ★授業・休み時間・部活動など様々な場面を設定
  - ★団体競技等により仲間と切磋琢磨する場の設定
- ●運動への意識付けを日常的に行います
  - ★日常的に運動に取り組み、体力づくりを習慣化

２ 久米南町の状況

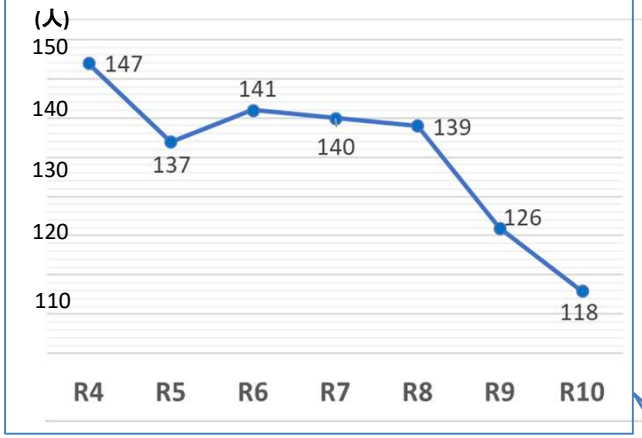
久米南町で、新しい教育環境づくりについて考えるのはなぜ？

１ 久米南町 人口推計



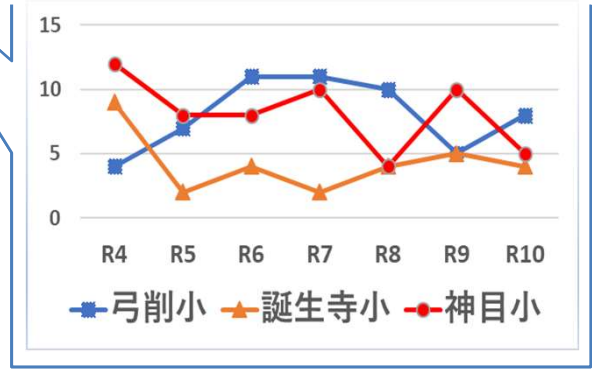
２ 久米南町 小学校 全児童数推移

※令和４年4月1日現在



	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
R4年度	25	33	19	24	19	27	147
R5年度	17	25	33	19	24	19	137
R6年度	23	17	25	33	19	24	141
R7年度	23	23	17	25	33	19	140
R8年度	18	23	23	17	25	33	139
R9年度	20	18	23	23	17	25	126
R10年度	17	20	18	23	23	17	118

３ 久米南町 小学校入学者（新1年生）推移



状況

■町の総人数が年々減少しており、少子高齢化が進んでいます。
■児童数も減少傾向にあり、この状況が続けば、令和9年度からはさらに急激に減少するみこみです。
■これまで多少の人数差はありましたが、3校ほぼ同様の環境の下、教育活動が実施できていました。
しかし、徐々に全児童数や年度ごとの児童数に偏りが生じてきており、今後、町内3小学校の子どもたちに同様の教育環境を等しく保障することが困難になると予想されます。
■児童数減少により現段階で3校とも複式学級が存在しています。（現在は町費講師4名で解消措置）

今後に向けて

◇「転出抑制」「転入促進」等の人口減少の抑制が必要
◇地域定着の促進が必要 → 地域への愛着心の醸成・地域に誇りをもつ子の育成
◇教育の充実に向け、安定的な教育環境が必要
◇町内等しく、共に育み合う教育環境が必要

２ 久米南町の状況

久米南町で、新しい教育環境づくりについて考えるのはなぜ？

町内小学校の状況

※令和5年2月1日現在の児童数

弓削小学校
47名

誕生寺小学校
41名

本年度の3小学校の
通常学級の人数は
3～13名
となっています。

神目小学校
58名

現在は

少人数を生かした教育を
3小学校の状況に合わせて行っています！

小規模校のメリット（少人数を生かした指導）

- 一人一人の学習状況や定着状況を的確に把握でき、きめ細かな指導が行いやすい。
- 意見や感想を発表する機会が多くなる。
- 様々な活動において、一人一人がリーダーを務める機会が多くなる。
- 異年齢の活動を組みやすい、体験的な学習や校外学習を機動的に行うことができる。
- 地域の協力が得られやすいため、郷土の教育資源を最大限に生かした教育活動が展開しやすい。
- 家庭の状況、地域の環境などが把握しやすいため、保護者や地域と連携した効果的な生徒指導ができる。

数年先を考えると・・

今後の児童数の推移から、児童数の減少にともない、
これらの課題が生じてくると考えられます。

児童生徒数が極端に少なくなった場合の課題

- クラスや学校全体で男女比の偏りが生じやすい。
- 運動会、文化祭、遠足、修学旅行「等の集団活動・行事の教育効果が下がる。
- 体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる。
- 班活動やグループ分けに制約が生じる。
- 協働的な学習で取り上げる課題に制約が生じる。
- 児童生徒から多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる。

※メリット・課題ともに文部科学省資料より

久米南町のめざす
教育の充実に向けて、
将来をみとおした
新しい教育環境の整備について
検討する必要があります。

３　久米南町での教育環境の提案 【基本の考え方】

久米南町で、新しい教育環境づくりについて考えるのはなぜ？

子どもたちが多様な考えにふれ、互いを認め、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人の資質や能力を伸ばすことを目指す**久米南町の教育を実現するためには**、教育課題の解決につながる**「新しい教育環境」を整えていくことが必要**となります。

久米南町を大切にし、愛する子どもを育てるために**久米南町全体を知る学びを充実させること**も手立ての一つとして考えられます。小学校段階から地域全体の多様な文化、地理、歴史、産業等にふれる学習を充実させ、中学校での地域学習「久米南学」につなげていくことにより、**ふるさととして久米南町を想い、考え、久米南町の活性化の一端を担う子ども**を育てていきたいと考えます。

新しい教育環境の整備

① ３小学校の統合

② 中学校との連携強化

町の目指す教育が
全ての学校で実現できるよう、
現在も各校で情報共有をしたり、
共通の取組を考えて実践したりと
4校で教育活動を確認しながら進めています。

統合により、小学校、中学校1校となれば
今まで以上に小学校と中学校の連携を
意図的に図っていく必要があると考え、
「中学校との連携強化」という
視点での整備も進めていきます。

３　久米南町での教育環境の提案 【基本の考え方】

新しい教育環境の整備

３小学校の統合　　中学校との連携強化

大事にしたい考え方①

３校のよさを生かした学校づくり

単純に、新たなひとつの学校に
一新するということではありません。

３校がこれまで大事に継承してきた学校の特色や歴史、文化や地域など、それぞれを尊重し、生かし、継続していくことを最大限重視しながら
３校を融合し、
新たなよりよい教育環境を
考えていくということを
大切に考えています。

大事にしたい考え方②

学校を核とした地域づくり

学校は「教育の場」という役割に加え、
「地域コミュニティの核」としての
役割もあります。
「地域交流、町づくりの象徴」でもあります。
そのため、学区が広がっても
地域の特性を活かした
学校と地域のつながりは
これまで以上に充実するよう、
学校を核とした地域づくりを大切に考えていきます。

大事にしたい考え方③

９年間の連続性に配慮した学びの場づくり

小中の連携やつながりを意識し
９年間の系統性・連続性に配慮した学びを推進することで、
教育内容や学習活動を
より一層充実したものにしていきます。
小中のネットワークの強化により
地域コミュニティの構築の推進にも
つながると考えます。

３　久米南町での教育環境の提案 【基本の考え方】

新しい教育環境の整備

３小学校の統合　　中学校との連携強化

具体的な環境整備の取組

現在行っている、きめ細かな指導や
地域の教育資源を生かした教育を継続しつつ
統合により
こんなことを実現！
こんなことを強化！

実現　**子どもが共に学び育つ環境を創る**

○不安定な状況を回避し、一定程度の集団規模の維持による「共に育みあう」教育集団をめざします。

強化　**郷土への愛着心の醸成に努める**

○「地域の子どもは地域で育てる」という地域の教育力向上にもつなげていきます。
○子どもたちがふるさと久米南町に愛情と誇りをもつ「郷土を大切にする心」の醸成に努めます。

実現　**小学校と中学校のより一層の連携強化をめざす**

○小学校と中学校の教員が連携し、９年の長期的な視点に立った学習指導を新たな形で整えることで教育内容や学習活動の量的・質的充実を図ります。

4　久米南町での教育環境の提案　①子どもが共に学び育つ環境を創る

友達と共に育つ教育環境

・人間関係構築力
・コミュニケーション力
・力を寄せ合う経験

たくさんの友だちと接することができます

人間関係の固定化が生じにくくなります

友だちとの関わり合いの中で適切な習慣や人間関係づくりを学ぶことができます

集団が大きくなることでパフォーマンスもダイナミックになります

質の高い教育環境

大集団での学習や小グループによる活動など様々な学習形態にも対応できます

友だちの多様な考えにふれることができます

この対話（交流）は
少人数学級でも可能ですが、
ある程度の学級の人数があれば、
多くの友だちと交流することで
いろいろな考えにふれる
チャンスが広がります。

様々なグループ形態で話し合わせることにより
新たな気づきを生むしかけを
つくっていくこともできます。

その結果、自分の考えが
より深まり、広がる可能性や
自分を高める力の伸びなどが
期待できます。

安定した教育環境

極少人数の学級を回避できます

今まで通りの単学年の学びを継続できます

新しいものを見つけたり、
自分にしかないものを見つけたら、
子どもは目を輝かせます。

そして話し始めます。
自分のこの発見を
「だれかに伝えたい！」と思うからです。

「言いたい！」「伝えたい！」という思いは、
周りを自然と「聞きたい！」という気にさせます。

友だちが一生懸命語る
「発見」や「気づき」を聞いた子どもは
必ず、自分の考えと比べて、
「あっそうか」とか「自分はこう思うんだけど・・・」
という思いになります。

そして、自分のタイミングでその思いを
相手に伝えるために、語り始め、
周りがまた、「そうか・・・」「なるほど！」と
友だちと自分の考えと比べながら考える・・・
というように
対話（交流）が始まります。

②郷土への愛着心の醸成に努める

統合により
さらに強化!!

現在も学校だけでなく**地域も参画して子どもを育てる活動**を設定し、「地域とともに子どもを育む学校づくり」を進めています。
多様な人と関わり、学校だけでは体験できない活動や経験を重ねていくことで子どもたちは豊かに成長します。
現在の**学校と地域のつながりを大切に**しながら、
さらに広く、深いつながりとなるように充実・発展させていきます。

地域の方との
関わりを通して
多くの考えを知ることで
いろいろな角度から
物事を見たり、
考えたりすることが
できます

地域の方々に
学校の応援団として
様々な教育活動に
関わってもらうことで
たくさんの地域の方と
ふれ合うことが
できます

久米南町への
愛着と
理解の育成

先生以外の大人に
ほめてもらえる
機会が増え、
いろんなことに
やる気が出たり、
自信がもてたり
します

「地域」の枠組みを
現在の小学校区から
久米南町全体に
広げることで
小学校の時期から
町全体を知る経験が
できます。

地域の方と共に
地域を学ぶことで、
さらに地域を
好きになります

学校からも
地域に向けて
貢献活動や発信を
積極的に行います

統合により
ここが変わる!

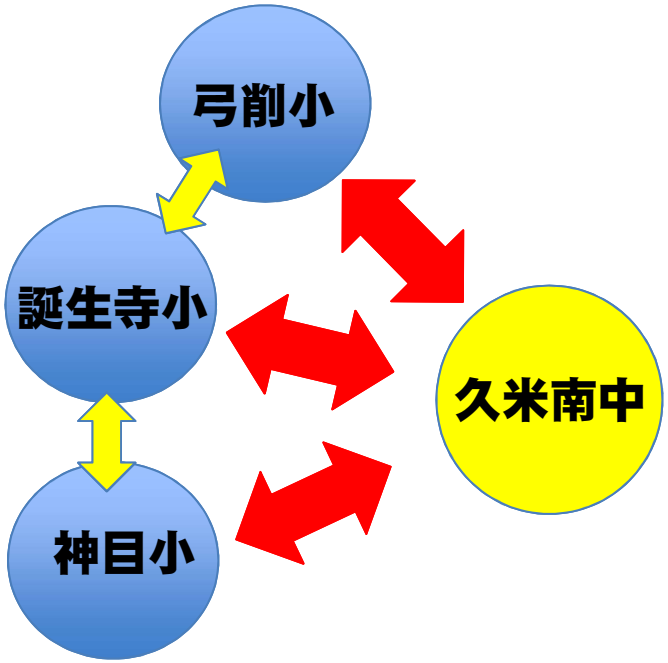
子ども自身が
地域と
主体的に関わる
地域学習を
行います

これまでの地域学習は、3小学校とも、小学校区内を中心に行っていましたが、
学習する地域は、統合対象各地区（久米南町全体）に広げます。
それぞれの地区の多様な文化・地理・歴史・産業等の教育資源を積極的に活用した教育活動を展開することにより、地域学習やふるさと教育を充実させていきます。

（1）小中のつながり（小中連携）の仕組み

児童生徒を取り巻く社会状況が様々に変化する中、児童生徒に関する課題が多様化、複雑化しています。
学校においては校種間の枠を超え、複数の学校段階間で連携して課題解決にあたることがより一層求められています。

【これまでのつながり】　3小と1中



★学校全体に関わること
・校長会　・教頭会

★教育全体に関わること
・久米南町教育会　・教務主任会

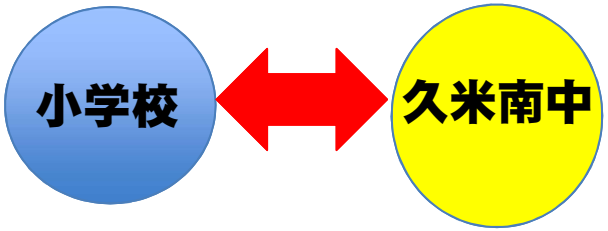
★学力向上に関わること
・研究主任連絡協議会（学力向上担当者会）

★心身の健全育成に関わること
・学習習慣形成推進委員会

★地域学習の充実に関わること
・久米南町子ども応援運営委員会

★その他
・特別支援教育支援委員会　・事務職員共同実施

【小学校統合後のつながり】



1小と1中となるため、より一層の連携強化が期待できる。

（２）制度上の類型

小中連携教育

小・中学校段階の教職員が互いに情報交換や交流を行うことを通じて、
小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育

小中一貫教育

小中連携教育のうち、小・中学校段階の教職員が、目指す子ども像を共有するとともに、９年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す教育

義務教育学校

一人の校長の下、
一つの教職員組織がおかれ、
義務教育９年間の学校目標を設定し、９年間の系統性を確保した教育課程を編成・実施する学校

小中一貫型小学校・中学校

組織上独立した小学校及び中学校が一貫した教育を施す形態で、
小学校、中学校それぞれに校長、教職員組織を有する学校

併設型小学校・中学校

同一の設置者によるもの

連携型小学校・中学校

異なる設置者（県立学校と市町村立学校等）によるもの

いずれの学校も施設の形態（一体型、隣接型、分離型）は問わない。

（3）義務教育学校及び小中一貫型小学校・中学校の要件

		小学校・中学校（現行）	小中一貫型小学校・中学校（併設型）	義務教育学校
		組織上独立している	組織上独立した小学校及び中学校が一貫した教育を施す形態	一つの学校
組織運営		・小学校、中学校に一人の校長 ・小学校、中学校に教職員組織	・小学校、中学校に一人の校長 ・小学校、中学校に教職員組織	・一人の校長 ・一つの教職員組織
修業年数		・小学校　6年 ・中学校　3年	・小学校　6年 ・中学校　3年	・9年 （前期課程6年・後期課程3年）
教育課程		小、中それぞれ教育目標の設定 小、中それぞれ教育課程を編成	・9年間の教育目標の設定 ・9年間の系統性を確保した教育課程の編成	
教育課程の特例	一貫教育に必要な独自教科の設定	不可	可能	
	指導内容の入替・移行	不可	可能（設置者の判断による）	
施設形態		施設は分離	施設一体型　・　施設隣接型　・　施設分離型	
設置基準		中小学校には小学校設置基準 学校には中学校設置基準を適用	小学校には小学校設置基準 中学校には中学校設置基準を適用	前期課程は小学校設置基準 後期課程は中学校設置基準を準用

（4）小中一貫教育になったらできる学校教育

①小学校高学年における教科担任制

②多様な異学年交流

現在の
取組を
さらに発展！

③学年段階の区切りの柔軟な設定

④特別支援教育の充実

新たに
可能となる
取組！

（4）小中一貫教育になったらできる学校教育

①小学校高学年における教科担任制

現在の
取組を
さらに発展！

（例）

◆特定の教科における専科指導　　小学校6年生の理科を中学校の先生が指導
小学校5、6年の英語を中学校の先生が指導

◆特定の教科を専科でもつ教員が主導し、各学級の担任が共に指導する（ティームティーチング）

★教科担任制メリット

◎専門的な指導を充実させることができ、学力や学習意欲の向上が期待できます。

◎学級担任制と一部教科担任制を併用し、多様な教員が関わることで、
・子ども達の良さを多面的に評価したり、資質能力を伸ばしたりすることができます。
・問題行動を早期に発見し、複数教員の連携で迅速に対応する体制を整えられます。

★学級担任制メリット

◎学力や学習状況を総合的に理解し、きめ細やかな指導に生かすことができます。
◎生活上の課題も含めて総合的に指導することができます。

児童の実態を踏まえ、学級担任制のよさと教科担任制のよさを兼ね備えた指導体制をつくっていくことが必要です。

（4）小中一貫教育になったら　できる学校教育

②多様な異学年交流

現在の
取組を
さらに発展！

（例）
◆小学校と中学校における合同の英語の授業　◆総合的な学習の時間における合同学習
◆水泳や陸上競技等における中学校の生徒の小学校児童への指導や支援
◆小学校と中学校の合同行事の実施（運動会･体育会など）
◆小学校中学校合同の児童会･生徒会活動の実施

★異学年交流メリット

◎異学年での学びが新しい気付きや学習の振り返り、学習意欲の向上につながります。

◎異学年交流によって社会性やリーダーシップを育てることができます。

◎多様な人間関係をつくっていくことができます。

◎単独の小学校や中学校では確保できない十分な集団規模で教育活動が行えます。

異学年交流そのものが目的ではないため、ねらいにふさわしい交流活動になるようにする指導の計画や工夫が必要です。

（４）小中一貫教育になったら　できる学校教育
③学年段階の区切りの柔軟な設定

新たに
可能となる
取組！

（例）
◆４－３－２　小学校段階１年～４年
小学校段階５年～中学校段階１年
中学校段階２年～３年

◆５－４　小学校段階１年～５年
小学校段階６年～中学校段階３年

★区切りの設定について

◎厳密なきまりがあるわけではありません。

◎教育を充実させていくための工夫として設定されます。

（例）
・目の前の子どもたちの課題を踏まえて、それらを解消するための指導上の重点を定めて取組を徹底する
・小学校校段階と中学校段階の間の意図的な移行期間を設け、円滑な接続に向けた取組を強化する

今まで最高学年だった6年生がリーダーシップを発揮できなくなるんじゃないかしら

４－３－２というように学年の区切りを設けるとすると、６年生は中間段階に位置づけられ、最高学年としてのリーダーシップは発揮できにくくなります。
学年段階の区切りは行いつつも、運動会等の学校行事は小、中分けてするなど、６年生の出番を確保し、リーダー性の育成を重視する取組を設けていくことで、リーダー性を育む工夫をすることができます。

（４）小中一貫教育になったら　できる学校教育

④特別支援教育の充実

新たに
可能となる
取組！

★充実のポイント

◎９年間を通じた一貫した指導や支援を行うため、小学校と中学校の教員間の連携がとりやすくなります。
それにより、小学校段階での指導や支援の内容について情報が引き継がれやすいことから継続性のある指導や支援を行いやすい状況にあるといえます。

◎小学校から中学校に進学をする場合、保護者にとっては、学校との関係を一から作り直さなければならなかったという負担がありました。
小中一貫教育では、保護者と学校が９年間継続的に関係を築きやすいというメリットがあります。

◎小学校から中学校への進学の際の接続がよりスムーズになります。
新しい環境に適応しにくい児童にとっても大きな環境の変化が少なく、過ごしやすさを整えていくことができます。